

| | | | |
|---------|--|------------|------|
| 氏名 | 鈴木 健介 | | |
| 学位の種類 | 博士（コーチング学） | | |
| 学位記番号 | 博甲第 9604 号 | | |
| 学位授与年月 | 令和 2 年 3 月 25 日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | サッカーにおける相手ディフェンダーとミッドフィルダーとの間 を利用した攻撃に関する研究 —プロサッカーリーグを対象として— | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士（コーチング学） | 中山雅雄 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士（工学） | 浅井 武 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（コーチング学） | 秋山 央 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（体育科学） | 仙石泰雄 |

論文の内容の要旨

鈴木健介氏の博士学位論文は、サッカーのゲームでのディフェンスライン（以下 DF）とミッドフィールドライン（以下 MF）間を利用した攻撃の有効性を明らかにし、日本国内トップレベルのリーグと世界トップレベルのリーグの DF-MF 間を利用した攻撃様相およびプレー様相の比較により、日本国内トップレベルのリーグの課題・特徴を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

第 1 章で、まず、著者はサッカーのゲームパフォーマンス分析の結果が実践現場での有用な示唆となるためには、ゲーム状況を限定した上で相手との相互作用を検討可能な測定項目を用いる必要があることを先行研究から明らかにした。そして、実践現場において得点機会獲得のために重要視されている DF-MF 間を利用した攻撃について科学的研究を行うことの意義、及び、日本のトップリーグである J リーグ（以下 JL）と海外のトップリーグとの比較、国内リーグの上位と下位クラブを比較することで JL の課題を明確にし、JL および日本サッカーの進歩・発展に繋がる示唆を得ることができると述べている。

第 2 章では、記述的ゲームパフォーマンス分析で、DF-MF 間を利用した攻撃の有効性を検討し、さらに、DF-MF 間を利用した攻撃プレーに着目して J リーグとブンデスリーガ間の攻撃様相の比較を行い、J リーグの攻撃の特徴や課題を明らかにするための研究課題 I について述べている。その結果から、DF-MF 間を利用した攻撃の有効性は明らかとなった。また、DF-MF 間を利用した攻撃は得点機会を得ることや得点に繋がる有効な攻撃であり、JL は BL と比較して攻撃成功率および DF-MF 間を利用した攻撃の生起率が低いことも明らかとなった。このことから、DF-MF 間を利用した攻撃の生起率を高め、攻撃成功率をあげることが JL の課題の 1 つであると結論づけている。

第 3 章では、DF-MF 間を利用した攻撃プレーにおける JL と BL の特徴や違いおよび、得点機会獲得のための JL の課題を検討することを目的とした研究課題 II について述べている。主な結果として、JL は DF-MF 間でボールを受ける際、前方 DF のいない状態でボールを受けることでプレー方向「前方」

の生起率とプレー成功率を高めることが重要であることが推察され、JLはDF-MF間侵入率とDF-MF間を利用した攻撃における得点機会の生起率を高める必要があると考えられたと述べている。さらに、JLは下位がDF-MF間を利用した際に、前方へのプレーおよびプレー成功率を高めることで得点機会の生起率を高め、上位との差異をなくすことが課題の一つであると結論づけている。

第4章では、第2章の研究課題I、第3章での研究課題IIの結果を総合考察としてまとめたものである。その考察から、JLがレベルアップするための課題と課題解決のための方策として、以下に結論を示した。

1. JLは攻撃成功率の低さが課題であると考えられ、この要因としてDF-MF間を利用した攻撃の割合が低いことが示唆された。

2. JLは、DF-MF間に侵入した際の前方へのプレー生起率および、プレー成功率の低いため、DF-MF間へ侵入することのリスクが高くなり、DF-MF間侵入率がBLよりも低くなっていると考えられた。このことがDF-MF間を利用した攻撃の割合の低さに繋がっていることが推察された。

3. JLにおいて、DF-MF間における前方へのプレー生起率および、プレー成功率を高めるには、DF-MF間に侵入した際にゴール方向に相手DFがいない状態の割合を高めることおよび、このことに繋がるオフ・ザ・ボールの局面の「パスの出し手とのタイミングを図ること」が重要であると考えられた。

4. JLの下位は上位よりもDF-MF間を利用した攻撃における得点機会の生起率が低く、JLは試合内容が拮抗していない可能性が示唆された。

5. JLの下位はDF-MF間でボールを受けた際に相手DFがいないという状況を把握することで、ボールを前方へ進め得点機会の生起率を高めることが重要であると考えられた。

第5章は、総括として以下のようにまとめた。DF-MF間を利用した攻撃は、JLおよびBLにおいて、DF-MF間を利用しない攻撃と比較して得点や得点機会に繋がりやすい有効な攻撃であることが明らかとなった。また、JLは攻撃成功率の低さが課題であり、この課題の解決のためにはボールを受ける前のオフ・ザ・ボールの局面においてパスの出し手とのタイミングを合わせることで、ボールを受けた際に相手DFのマークを外すことが重要となると考えられた。このことによりDF-MF間でボールを受けた選手の前方向へのプレー生起率およびプレー成功率が高まり、DF-MF間に侵入するリスクが低減し積極的にDF-MF間への侵入を選択できるようになると推察された。さらに、DF-MF間に侵入するリスクの低減はDF-MF間侵入率を高めること、DF-MF間を利用した攻撃の割合を高めることに繋がり、攻撃成功率を高めると考えられた。また、JLは下位が上位よりもDF-MF間を利用した攻撃における得点機会の生起率が低く、試合が拮抗していないことも課題であることが示唆された。この課題の解決のためには、下位がDF-MF間でボールを受けた際に、攻撃方向からの相手DFの有無を正確に把握し、相手DFがいない場合を逃さず前方へのプレーを行うことが重要となると考えられた。

審査の結果の要旨

(批評)

これまでの関連研究の多くが定性的な分析であったのに対して、本論文では多くの定量的データを使い、従来の知見をより明確に結論づけることができた。そのことによって、コーチング学で重要になる、指導現場へのより具体的な示唆を提供することができた点は高く評価できる。サッカーのゲームは複雑であるために、今後も多くのデータの蓄積が必要であるがその先鞭をつける研究であり、今後の発展が期待される。

令和2年1月28日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(コーチング学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。